

## 「鉤」を 考 え る

鉄 軍

---

「鉤」は一種の生活・生産手段として歴史が古く、早くも更新世後期の新人類たちはすでに獣の骨や角によって釣針を造っていた。この時期の新人類は人類進化の最終段階に至っており、かれらの手によって造られた釣針は今日のわれわれの使っている金属製の釣針と外観の上ではさほど差がない。この点については全世界範囲で発掘された出土品中の釣針が立証している。しかし、実際、これはまだ最初の「鉤」と言えない（道具としては言えるかもしれないが）。人類の先祖たちは生存のため、植物採取、漁撈、狩猟の中で木に登ったり魚を捕ったり棒切れを握ったりすることがどうしても必要だったが、その時の手が「鉤」状を呈していた。後になって植物採取の範囲が拡大し、社会が進歩・発展する中で、人類は手よりももっと便利で鋭利な「鉤」および鉤状の道具を求め、手の効能上の欠点を補うことが必要となってきた。こうした過程の中で、「鉤」の機能がたえず認識され、「鉤」自身もしだいに完璧化されてきた。この意味で言う、「鉤」は手の発展と延長であり、手から「鉤」への変化は人類のバイオニクス領域における最初の成果だと評価しても過言ではない。したがって、「鉤」に対する研究は歴史の研究であり、人類自身の研究でもあると言えよう。

## 一. 「鉤」の定義

「鉤」が広範囲にわたって利用されているのにもかかわらず、その定義についての説明はほぼ一致している。中日両国の権威性を持つ辞書からいくつか抜粋して引用することにしよう。

1. 先の折れ曲がった金属製の器具、ものを掛けるのに用いる。先の折れ曲がったものの〔形〕の総称。〔広辞林・日本〕

2. 先端が曲がっている金属製の棒、ものをひっかけるのに使う。〔学研国語大辞典・日本〕

3. ものをひっかけ、連結か懸垂に用いる工具。〔辞源・中国〕

4. 先の曲がった金属製の道具。ひっかけてものを止める（引く）時に使う。多くは直角。〔新明解国語辞典・日本〕

5. 懸垂あるいは物を探り取るのに用いる器具。曲がった形をし、先が尖っている。〔新華字典・中国〕

以上に挙げた「鉤」の説明は「鉤」の形状に関してはほぼ同様な論述をしている。ただ、新明解国語辞典の「多くは直角」との説明を現実の立場から見ると実際の角度はほとんど直角の90度を越えており、むしろ90度は最少限度であり、90度を割ると「鉤」としての機能をなくし「鉤」ではなくなる。なぜかと言うと、「鉤」の基本的機能は物体の懸垂と連結にあり、角度が90度より小さいと物体がそれ自身の重みにより「鉤」から滑落することになる。実際に用いられる「鉤」は直角よりも緩やかなカーブ状のものが多く、最終の角度が180度になるものも非常によく見られる。直角説は結局のところ大まかな基本概念に過ぎず、「鉤」の実際の形状を完璧に表現するまでにはいかない。それだけが「鉤」だと思えば大間違いである。

人類の生活、生産が今日のような高水準に達し得たのは「鉤」がその中で計り知れない役割を果たしているからだと言えなくもない。これは人類の生活、生産活動が多様化、多機能化してきた所以である。いくつかの単独物体を相対的に独立しながら一つの集合体として機能するように連結する手段は

## 「鉤」を 考 え る

ほかにも鎖、ボルト、紐など数多くあるが、各単独物体の個体としての役割を十分に発揮することでは「鉤」ほど便利なものはない。みじかな例であるが、牽引する機関車と牽引される車両との可分・不可分の関係がこの「鉤」の作用によって成立っている。機関車は単独では存在意義がないし、牽引されない車両も役に立たない。逆に独立できない機関車と車両も不便である。こうした矛盾は可分の連結関係を結ぶ「鉤」の機能によって一挙に解決された。バス、トラックなど別の輸送手段では「鉤」による連結手段を用いないので列車輸送に比べ、機能（自由編成、自由分離）の上では遙かに及ばない。列車は「鉤」がもたらしたメリットがなければ、単車両で走る市電のようなものになり、いつか道路を走る自動車にとってかわられてしまう。列車は一例に過ぎず、周囲をよく見回すと同じような例がいっぱいあることに気がつくであろう。中国の農村部ではいまでも水汲みに天びん棒が使われるがその両端の紐に「鉤」が付いており、バケツを井戸まで運び、それから井戸の轆轤の「鉤」に掛替える。「鉤」がなければ、紐を解いてさらにバケツを轆轤に縛りつける方法も水汲みできるが能率的ではない。船に欠かせない碇もそうであるが、「鉤」の特質が生かされ、水のなかに船をしっかりと泊める役をしている。科学が発達した現代になったとは言え、それに替わる手段はまだないではないか。「鉤」の着脱自由の性格は人類の生活、生産をどれだけ便利なものにしたか分からない。

歴史的に見れば、社会の進歩・生産の発達につれて、数多くの古い生活・生産手段が捨てられ、それに代わってもっと能率的な、効果的なものが求められた。「刀耕火種」の原始農法は人類を植物採取、狩猟の原始的生活から救ったにもかかわらず、後に鋤などの金属農具と有機肥料による農法に位を譲った。近代になってまたトラクターと科学肥料が代表する新農法が登場した。この止め度もなく変革・革命が起こっている中で人類は自分の生活水準を高め、生産手段を能率化してきたが、「鉤」はいまになってもそれほど変わらず、原型を止め、その機能がいかされつつあるのである。それは「鉤」の性格がどんな生活・生産方式の変化にも適応し、その中で機能しているからである

う。シーラカンスを捕ったとき、人々は生きた化石だと驚き、大いに研究しようと意気込んでいたが実は「鉤」も道具分野では生きた化石的意義を持っているのではないと思われる。

## 二. 「鉤」の存在意義

社会の発展につれて、「鉤」の応用範囲が広がり、運用方式もぐっと多彩化してきた。われわれの周辺を見れば分るようにどこでも「鉤」が機能している。

「鉤」には主に前述の懸垂、連結などの用途があるが、懸垂では「鉤」の利点がよく生かされ、代用できるほかの方法はない。日常生活に使われるハンガーから荷物の上げ下ろしに欠かせないクレーンまで「鉤」が中心的な存在であり、なければハンガーはハンガーにならないし、クレーンもクレーンにならないのである。連結の機能ではその自由自在に着脱できる特徴は溶接、粘着、ホルトなど着脱困難な連結手段になく、まさにそのような利点があるからこそ、代々受継がれ、使われてきたのである。

連結の目的に用いられる「鉤」は列車の連結器のように複数以上で用いられ、「鉤」同士の連結になっている場合がある。「鉤」によって機関車、荷物車、客車、食堂車と自由に列車を編成できるし、また、山間地帯では動力を増やすためにさらに二台の機関車を繋いで走らせることもできれば、先頭と車尾各一台の形で列車を進めることもできる。このような勝手なことができるのは「鉤」のおかげであろう。

懸垂に用いられる「鉤」にかかる物体はそれ自身の重みにより、しっかりと「鉤」に掛かり、受力の方向さえ変わらないかぎり「鉤」を離れることはない。もちろん、「鉤」に掛かることが最終の目的である場合、例えば、絵、服、帽子を掛ける「鉤」があればクレーン、釣針のように他方への移動が目的である場合もあるが「鉤」に掛かる方式と離脱する方式は変わらない。

このように人類が「鉤」を発明し、応用することにより、自分自身の生活・

生産活動を便利にし、その内容を豊かにしてきた中で、「鉤」は深く各分野に入込み、ますます欠かせない存在になった。

### 三. 「鉤」の多機能化・多目的用途

「鉤」は基本的形状をずっと変えずに使われてきたが、「鉤」の効能・用途が単一だということを意味しているわけではない。社会の発展や生産活動の複雑化に従って、「鉤」の機能に対する再認識とその用途に対する深開発が行われ、「鉤」に潜められた限りない可能性がたえず認識されている。

われわれの周辺では「鉤」は意識されないまま、案外多く用いられている。これは「鉤」の用途が多角に開発され、別のなにかと組合わせられ、基本的な機能を超越して使われ、人々の視線が「鉤」以外の点に集中しているからである。例えば、農具の中の鎌、鋏、鶴嘴、犁、鋤、などいずれも「鉤」の基本的形状を具有しながら、別の用途に使われている。もしも、その角度が直角以下、すなわち90度以下のものであればどれ一つも機能を失うか、薄めることになるであろう。これらの農具はその刃、尖った先が主として機能するところであり、「鉤」の基本的機能は目立たないのである。また、「鉤」の基本的形状を持ってはいるが、「鉤」として認知されない南京錠も一例と言えよう。「鉤」の掛けられやすい形状に開閉機能がついたものであり、必要に応じて「鉤」に戻ったり（開いた状態）、環になったり（閉じた状態）する。よく見られる旅行カバンやスポーツバッグにも開閉機能の付いたフックが使われており、必要に応じて、ベルトを取ったり、付けたりすることができる。閉じた状態になると方向が逆になっても主体から離脱しにくく、「環」として機能する。電柱などを固定するのにはワイヤを引張るネジのある「鉤」が使われ、回すとネジの作用でワイヤを必要な程度に引張ることができる。壁掛け式の電話にも「鉤」が作用しており、受話器を掛けると同時にスイッチの役をしている。まさに、一石二鳥の効果である。

製鋼業に用いられる取り瓶は移動の際、「鉤」に吊られて行われるが、「鉤」

は同時に軸受けの役目も果たす。また、「鉤」の機能をさらに高めるため、例えば、掛かった魚が逃げないように、釣り針にかえしが付いているが、このかえしも結局もう一つの「鉤」であり、「鉤」を十二分なところまで活用した例である。ものを引掛ける道具として棒が付いた「鉤」もよく用いられる。編物のクロッシェ、火かきなどがそれである。

もちろん、「鉤」の多機能化・多目的用途は科学が進んだ現代だけではない。古代の戦争でも複数の機能を持った「鉤」の使用例が見られる。中国の古典名作「水滸傳」第五十七回「徐寧教使『鉤鎌槍』 宋江大破『連環馬』」では官軍の三十頭ずつ繋がれた連環馬軍の侵攻に敗れ、戦死者無数、捕虜五百、戦馬三百の損失を被った宋江は部下の献策を聞入れ、ある兵器を使うことに決め、次の戦いで官軍の連環馬陣を破ったという名戦例が書いてあるが、それが馬の蹄をひっぱってそれを倒し、さらに槍で馬上の敵兵を刺殺す鉤鎌槍である。この「鉤」と槍の両役を一身に集した兵器の類似したものは中国でいまでも消防工具に使われ、人間に役だっている。また、日本古式の馬鐙は現代の洋式の馬鐙と違って「鉤」状のものである。洋式のより、着脱しやすく、走行中に落馬しても、足が嵌まってひき引きずられることはないので、第二次災害を防ぐことができるのである。こういった戦争に用いられる「鉤」は目立たないが、軍隊の機能を高め戦いを勝利へと導く要因の一つとは言えるであろう。

日常生活の例であるが、われわれの部屋のカーテンをかけるS型の「鉤」はレールとカーテンとの間を連結する役をしているが、あえてここではそれを「雙向開口鉤」と仮称しておく。このような「鉤」は「環」によるもう一つの掛かたより随時外して取替えたり、洗濯したりすることができるというメリットがあり、便利で、能率的である。半透明の紙に替わるガラスの発明により、室外から光線を取る大型の窓が可能になったが、プライベートなことを外の人の視線から守る手段—カーテンも必要になった。「鉤」のおかげで、その普及が実現したと言って過言であろうか。

要するに「鉤」は多機能化・多目的用途がゆえに歴史を変え、生活様式を

変え、生産方式を変える諸革命、諸変革の中で、抛棄されず、埋没されず、逆にそれを推進する役を扮してきたとわたしは考えている。

#### 四. 中国語における「鉤」の抽象的表現

多くの昔の道具はその後の社会発展の中で、単なる道具の概念から脱出し、抽象的に用いられ、比喻を大いに豊富なものにするのに役だっている。石器時代の石斧はのちに金属の斧になり、さらに人間のばかな行動を風刺する「班門弄斧」（シャカに経）の意味でも用いられ、石刃も金属の刀を経て、偽善者の陰険さを表現する「笑裏蔵刀」の場合にも使われている。「鉤」も同様にその広範な用途から、数多くの熟語やことわざが生まれた。例として、次のいくつかを挙げてみることにする。

1. 掛鉤／「鉤」をどこかに掛けるという意味だけでなく、両者間の協力関係も表すことができるが、こういう「鉤」の必要に応じて自由に離脱できる基本的性格が生かされた協力関係は人間社会を構成する多種多彩の関係の中で重要なものである。相互間の「掛鉤」関係はどちらも「鉤」であることにより、自由に離脱できる、いわば、独自性を持った、平等な相互関係と言えよう。すなわち、お互いに協力を約束しながら、各自の独立性を守っていることである。物理的意味の掛鉤の様子を非常に連想しやすいが、実際はまた、誰もそのイメージにこだわることなく、協力関係を指す場合、その抽象的な一面だけ意識のなかに取入れている。

2. 上鉤／本来は魚が釣針に掛かるという獲物が餌に食付く意味で用いられるが、のちに、罨にかかるという抽象的な比喻にも用いられるようになった。魚は「鉤」だけでは掛からないので、餌で掛かるように誘う。餌によって偽装した「鉤」の使用はある意味でこれは欺瞞行為であるが、相手が人間ではないので悪として扱われることがなくすむ。しかし、人間の行動に用いると、加害者・被害者の関係が生じるのである。すなわち、利益になるもので以て、相手を誘い込み、身動きできない羽目に立たせることによって自分

のいいなりにさせることが目的である。

3. 鈎心闘角／宮殿の建築の構造が精緻であることを表す語であるが、それぞれ思いをめぐらせて、排斥しあう、暗闘する比喻としても用いられている。

また、人体言語では「鈎」状になることができる指、手、腕がよく用いられ、場合によっては言葉以上の効果が得られるのである。実用例として次のいくつかを挙げてみよう。

1. 拉鈎／（指切り）二人が小指を掛合うことで、ある種の契約・約束の成立に合意することを表す。それには双方の意志が働いており、どちらかの一方が小指を「鈎」にしなかったり、途中で外したりすると誠意がないと考えても差支えない。

2. 挽手（腕を組合う）／これは連帯の象徴であり、「鈎」の物理的作用と抽象的意味を同時に表現している例である。腕を組むことによって各人の体を一体につなぎ、団結一致の意志を表明しているのである。誰かが腕を外すと一体化が崩れ、連帯感も失われてしまうのである。

3. 握手／これも一種の「鈎」の連結である。初対面のあいさつ、別れ、感謝、慰問などさまざまな意味合いを持っているが、一応はお互いに好意を持つ礼儀と考えていいのである。手が「鈎」状を呈して相手の手をはずれることなく握るのであり、指がまっすぐだと握手ができなくなる。握手によって信頼感が生れるが力入れ具合から相手の気持ち、態度を察知することができる。いわば、触覚による相手判断であり、視覚による判断を補うことができる。

また、動詞「勾」は「鈎」がある物体に掛かるときに使われると同時に「勾通」（疎通）、「勾引」（誘惑）、「勾搭」（結託）など数多くの抽象的な場合の使用例があるが、感覚的には「鈎」のイメージに結付き、「鈎」の作用を思わせる。いわば「鈎」の本来意義の動詞における意味の延伸である。

上に挙げた諸例は文化圏による差異があることは否定できないが、広地域に見られる現象であり、その存在は認知すべきであろう。



## 五. 文明史の立場から見る「鉤」

人類文明の起源を象徴するものが多く、中でもとくに石器、火の使用、陶器が大きく取上げられ、その社会の進歩における重要性が強調されてきた。しかし、「鉤」はその役目に相応した表現で紹介されず、「不公平」の待遇を受けてきた。前述のように更新世後期の新人類たちはすでに獣骨や角など硬質の材料で魚釣り用の釣り針を作り始め、狩猟でも逆刺付きの道具が使われていた。これらの「鉤」を用いた道具の使用により漁撈や狩猟の成功率が高められ、生活の質が向上したことは疑う余地はなかろう。いまでも日本の農村で使われているいろりの上部空間に鍋などの炊事道具を掛けるのに「鉤」（自在鉤）が使われている。いろりは原始人たちが防寒と煮炊の両目的で使っていた焚火とは本質的な違いはない。その点から推測すると焚火を使う煮炊きもいまと似たような「鉤」状のものが使われたのであろう。というのは炊事に使われる陶器の器が生れる前のかまどがなかったので、獣肉を木の棒に差し焼くか木の小枝のまたで改造した「鉤」に掛けて焼くかしかなかった。当時は細石器の出現によって加工技術が向上し「鉤」の製作はもうそれほど難しいことではなくなっていたと思われる。人類が生活、生産活動の中で、頭脳が鍛えられ、思考が繰返された結果として文明が出現するが、同時にこれらの文明はまた、いずれも人類のために新しい発端をもたらし、人類社会をたえずもっと進んだ段階へと押し進めた。「鉤」も同じように人類の思考活動の結晶として、従来の性質を守りながら、単純から複雑へと、単一用途から多用途へと進んできた。こうした過程は人類進歩の過程に付添っており、言い替えると「鉤」の発生とその後の質的、機能的向上は次期の多くの文明の発生に有利な条件を備え、多くの可能性を与えるという役割を果たしていたということである。

たとえ局部において「鉤」の役目が終わって、別のなかに変わっても全体的に見れば「鉤」の新用途がたえず開発され、これからもいっそうの活躍が期待されるであろう。

1992年11月豊田にて